京都水盆

楠見晴重
kusumi harushige
関西大学工学部土木工学科教授

図3—1（八十六ページ）は、解析の結果得られた京都盆地の地下構造の三次元立体図を、さまざまな方向から見たものである。青色の部分は基盤岩の形状を示している。最深部は旧巨椋池の下に当たり、約八〇〇メートルの深さである。また、基盤岩は最深部から北へ行くと浅くなり、その形状は椀状になっている。さらに三河川が合流する「天王山—男山」付近は、この基盤岩が急激に浅くなっていることがわかる。京都盆地の地下には天然の地下ダムが形成されていて、地下水の流出が少なく、かつ背後の基盤岩が椀状を呈していることから、多量の地下水が貯水されているものと考えられる。このような地質構造を水盆構造と呼ぶが、京都盆地はまさに典型的な水盆構造を呈しており、われわれは「京都水盆」と名付けた。

この水盆には、どれだけの地下水が貯水しているのか。

京都水盆の大きさは南北約三十三キロメートル、東西約十二キロメートル、深さは最深部で約〇・八キロメートルなので、その体積は約一二五立方キロメートルとなる。一方、京都盆地の中で行われたいくつかの深層ボーリングデータから、砂礫層と粘土層との割合はほぼ「56：44」となる。粘土層内に含まれる水分は砂礫層に比べて非常に少ないのでここでは無視し、砂礫層の平均間隙率が約三十パーセントとすると、京都水盆の貯水量（京都盆地の地下の砂礫層に存在する地下水の量）「G」は、

$$G=125km^3\times0.56\times0.3\fallingdotseq21.1km^3=21,100,000,000t$$

となる。この二一一億トンは、琵琶湖の貯水量約二七五億トンに匹敵する数値である。ほぼ琵琶湖に近い水量が京都盆地の地下に存在することになる。

京都盆地に流れ込む水は、淀川流域のうち「天王山—男山」線より上流の部分に降る雨水である。その流域面積は滋賀県、三重県にまでおよび総計約七〇五〇平方キロメートル。また年平均降水量は約一七〇〇ミリとされているので、年間降水量「P」は、

$$P=7050\times106m^2\times1.7m\fallingdotseq12,000,000,000t$$

（一二〇億トン）となる。

一方、京都水盆から流出する水は淀川のみで、旧建設省近畿地方建設局枚方流量観測所における約三十年間の観測データによれば、年間平均流出量「R」は約九十億トンとなっている。流入、流出の差は、単純には蒸発量「E」で、

$$E=P-R=3,000,000,000t$$（三十億トン）

となる。降水の表面流出量と地下浸透量との比率は湖面、山地、耕地、市街地等によって大きく異なるが、それらを平均して大まかに考えると、ほぼ等量とされる。したがって、この流域に降った雨水が表面流出する量と地下に浸透する量は、それぞれ四十五億トンとすることができるが、一度浸透した水も他に出口がないことから、何らかの形で再び淀川水系に戻って流下しているものと考えられる。図3—2（八十七ページ）は、以上のような水収支の状況を模式的に表わしたものである。

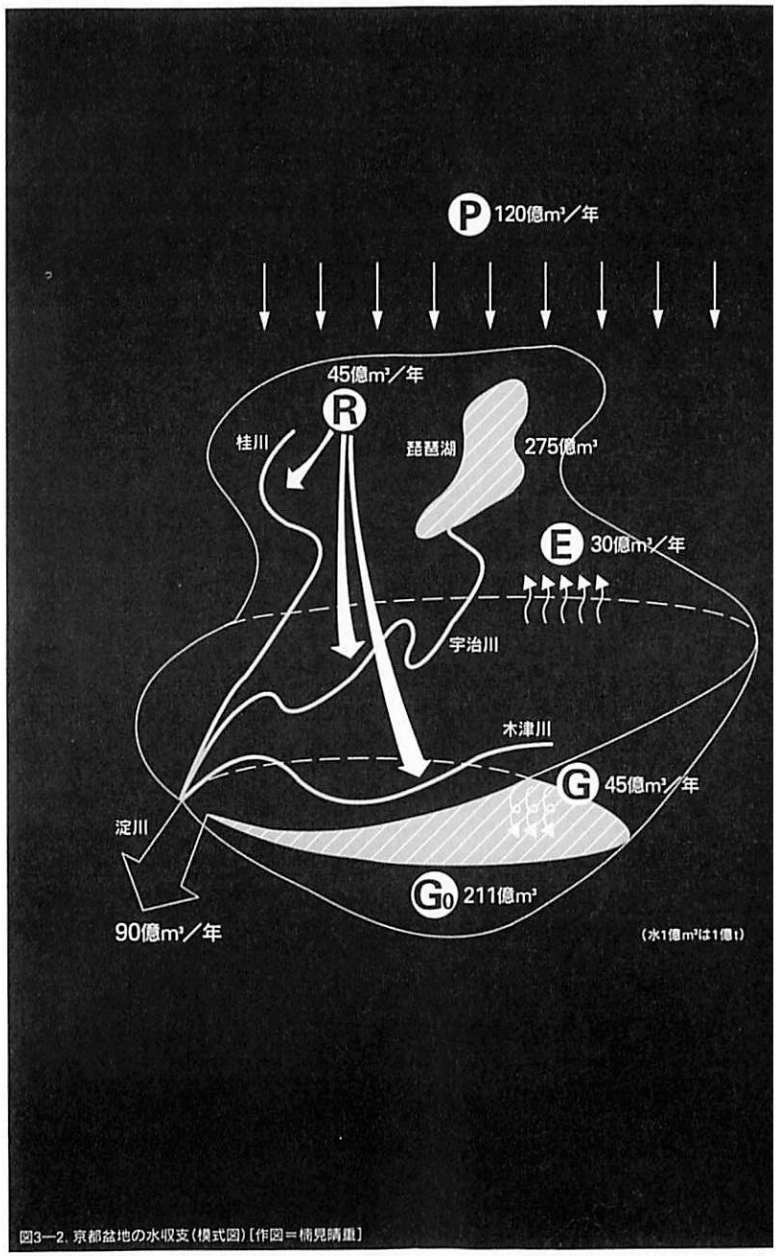

図3—2. 京都盆地の水収支（模式図）［作図＝柿見晴重］

都の水源「カモ」の聖地

地下の水甕の図像化は、新たな疑問を呈示することにもなった。古代の人びとは、目に見えない京都の地下水をどのように、そしてどこまで知っていたのだろうか。新都建造にあたって、「水」の豊かな土地を選定することは必須の条件だったはずだ。平安京造営に際してこの命題を無視したとは考えにくい。

周知の通り、平安京以前は難波宮などのわずかな例外を除き、都は奈良盆地の中を点々と移り変わった。楠見さんの話によると、奈良盆地も京都盆地と同様の地下構造をもつ可能性が高いという。つまり奈良盆地の地下にも水甕が存在するのだ。ただしその規模は京都よりもかなり小さい。平城京が手狭になり新たな都を築こうとした時、山を一つ越えたところに存在するもう一つの盆地・京都に目を付けたのはある意味当然だったのかも知れない。奈良時代、京都盆地一帯は「山背（やましろ）」と呼ばれていた。山向こうの鄙びた土地という意味だ。しかしそこは奈良盆地よりはるかに広い。新京にふさわしい場所であった。

桓武天皇は、延暦十三年（七九四）、新たな都を造営する旨を詔する。

「この国は山河襟帯（さんがきんたい）にして自然（おのずから）城をなす。この形勝により新しき号（な）を制（さだ）むべし。宜しく山背国を改めて山城国となすべし。また子来の民、謳歌の輩、異口同辞し、号して平安京と言う」（『日本紀略』）

「山河襟帯」というのは、山が着物の襟のように連なり、その麓に着物の帯のように川が流れる様をいう。まさに京都の風景そのものなのだが、これは奈良盆地の風景とも重なる。都にふさわしい土地という意味だ。ただ新京が「山背」では語感が悪い。桓武天皇は言う。ここがこれから日本の中心となるのだから「山城」と名を変えよう。新京の名は、誰もが「平安京」がいいと口をそろえている。新たな時代

を担う都にふさわしい名前ではないか……。

この詔の出典は『日本紀略』である。「略」というぐらいだから原本ではない。当時の正史は『日本後紀』であった。全四十巻の浩瀚（こうかん）な書物である。ところが幾多の戦乱を経るうちに三十巻が失われ、現存するのはわずか十巻に過ぎない。特に残念なのは、平安京造営前後の記述がすべて失われている点だ。これでは研究者が困るのも無理はない。何しろ最も詳しく書かれていたであろう正史がないのだ。後にまとめられたいくつかの略史を参考に、おぼろげな史観を提示するほか研究のしようがないのである。

さて桓武天皇をはじめ京都盆地に新京を置こうと決めた人たちは、ここが水に恵まれた土地であることをどの程度まで知っていたのか。残念ながら桓武天皇の「山河襟帯」という言葉を除いて『日本紀略』に記述は見つからない。ただ、京都盆地にこだわっていたフシはうかがえる。実は桓武天皇は、平安京造営の前にもう一つ別の都の造営を企てていた。今の京都市の西南に位置する長岡京市を中心として計

画された「長岡京」だ。桓武天皇はおよそ十年の歳月をかけて、ここに新都を造営しようとしたのだが、政治的な軋轢が生じ、やむなく断念した。この長岡京も当然京都盆地の一角にある。長岡京廃都にあたっては、桓武天皇の弟早良親王が謀反の疑いをかけられた上、非業の死を遂げたために、怨霊がはびこるのではないかと恐れられた。しかし桓武天皇はそれでも場所を北に少しずらしただけで、あくまで新都を京都盆地内に置こうとした。京都盆地に対する天皇の強いこだわりを感じさせる。その理由は何なのか。

手がかりを与えてくれたのは京都産業大学教授の所功さんだった。所さんは朝廷に伝わる儀式や京都に残るさまざまな祭りなどに精通する歴史家である。文献だけでなく儀礼や習俗から新たな歴史像を紡ぎ出そうとしている。その所さんが私の疑問に対して提示してくれたのが「カモ」というキーワードだった。

「カモ」とは鴨川の「カモ」だ。先述したように、鴨川は左京区の出町より下流を「鴨川」、上流を「賀茂川」と書く。この書き分けは、鴨川の畔に建つ二つの神社にも共通する。上流の「上賀茂神社」（賀茂別雷神社）と下流の「下鴨神社」（賀茂御祖神社）である。おそらく両神社が「カモ」に異なった漢字を当てたため、川もそのように書き分けられるようになったのだろう。「カモ」の名の起こりに関しては諸説ある。有力なのは「カミ＝神」が母音変化して「カモ」となったという説である。カモ川が「神の川」を意味すると聞くと京都人の鴨川への思いも、さもありなんと頷ける。

いずれにしても「カモ」と神は、切っても切り離せない。上賀茂神社と下鴨神社は、元は一つの神社で「カモ大社」と呼ばれた。所さんは言う。

「遷都の詔が発せられる前年の延暦十三年二月、桓武天皇はカモ大社に使者を遣わして、遷都への決意を奉告させています。このこと一つをとっても、京都盆地の中でカモ大社がいかに重要な存在だったかがうかがえます」

カモ大社は、もともとカモ氏と呼ばれる一族の氏神を祀る社だった。カモ氏は京都が都となる以前からカモ川流域を治めていた豪族であった。その起源には諸説あ

るが、有名なのは八咫烏（やたがらす）の伝承である。神武天皇の東征の際、天皇の一行は紀州熊野で敵に囲まれた。その一行を救ったのが八咫烏。山の抜け道を案内し無事大和まで導いた。その八咫烏の子孫がカモ氏だという伝説である。この伝承から学者たちは、カモ氏はもともと京都ではなく大和の豪族であったと推測する。それが集団移動していつしか京都のカモ川周辺に定住し、カモ氏と呼ばれるようになったというのだ。いずれにしても京都が都となるずいぶん前の話だ。平安遷都の際には、カモ氏はすでに京都の先住氏族であった。

このカモ氏の神を祀るカモ大社を、桓武天皇はなぜ敬ったのだろうか。一つには先住の一族に対する挨拶の意味もあっただろう。「これからここを都とするので、今後よろしく頼みます」といった具合に。しかしカモ大社に対する朝廷の信仰はその後ますます篤くなっていく。その象徴が葵（あおい）祭りだ。葵祭りはもともと「カモ祭」と呼ばれていた。カモの社に葵の花が咲き乱れる季節（現在では五月）に行われるので、葵祭りと呼ばれるようになった。起源は奈良時代にさかのぼるが、平安時代に

は朝廷の厚い庇護のもと、勅祭（朝廷の祭り）と位置付けられるようになる。

毎年、天皇の名代である勅使以下、宮中の諸役が大行列をなしてカモ大社に詣でる。華やかなパレードを一目見ようと場所取り争いまで繰りひろげられたと『源氏物語』が記すように、葵祭りは都で最大のイベントであった。平安時代、「まつり」といえば葵祭りを指したことはご存知であろう。天皇のカモの神への崇敬は葵祭りだけにとどまらない。天皇は自らの娘をカモ大社に住まわせ、カモの神の祭祀にあたらせていた。いわゆる賀茂の斎王だ。このような神社は皇祖神を祀る伊勢神宮以外には例がない。歴代の天皇はなぜこれほどまでカモ大社を特別に扱ってきたのか。所さんは続ける。

「カモ川流域を聖地とするカモ大社が祀るカモの神は、実は水の神だったのです。葵祭りの起源について、こんな話が伝わっています。欽明天皇の御代（五四〇～五七一年）に暴風や豪雨が相次ぎ、天下の農民が困りはてた。占うと、カモの神の祟りであるという。そこで四月（旧暦）吉日を選んでお祀りしたところ、雨風が治まった。つまり、カモの神は天の雨風を支配する力を持つと考えられていたということです。また今の上賀茂神社、下鴨神社の御祭神も水と深く関わっています。下鴨神社の御祭神は『玉依日売（たまよりひめ）』という女性の神です。玉依日売が瀬見の小川という鴨川の支流で遊んでいたところ、丹塗りの矢が流れてきた。丹塗りの矢は、古代においては雷光の象徴でした。それを床に置いていたところ、玉依日売は身ごもって男子を生んだ。その男子が上賀茂神社の御祭神である『賀茂別雷神（かもわけいかづちのみこと）』です。賀茂別雷神はその名の通り雷の神、雷雨をもたらす神です。このようにカモの神は川や雷、雨と切っても切れない縁がある。つまり水を司る神なのです」

なるほど、都の水を司る神であれば都の主たる天皇が深く敬う理由もわかる。カモの神の怒りを買えば、都はたちまち水で苦しむのだから。事実、カモ社（上賀茂神社、下鴨神社）は平安時代には山城の国の一宮になっている。朝廷はカモ社を都の守り神に任じたのである。葵祭りは、都の水の守り神に、天皇が感謝の意を告げる祭りだとすると、その意味もよくわかる。これが都の存続を願った祈りの行事だ

と思うと、朝廷をあげて荘厳なパレードをカモ社に遣わした理由もわかってくる。天皇とカモの神、この関係が都の知られざる水の歴史を探る鍵となりそうである。

下鴨神社は鴨川と高野川が合流する二つの川の中洲に建つ。このあたりは京都でも指折りの高級住宅地である。神社を取り囲むように邸宅やマンションが密集している。にぎやかな通りから鳥居を一歩くぐると、一面の緑が訪れる者を古の世界に誘う。参道沿いには高さ数十メートル、樹齢数百年の巨木が立ち並ぶ。境内の広さは三万六〇〇〇坪。古代山背原野の面影をとどめる鎮守の森だ。「糺(ただす)の森(もり)」と呼ばれるこの森は古い歴史と貴重な植生から、ユネスコの世界遺産に登録されている。

木々の葉音に耳をすませてみる。ざわめきの中から幽かな水音が聞こえてくる。小川のせせらぎだ。参道の東側には泉川、西には瀬見の小川が流れている。森を潤す清らかな水だ。下鴨神社の中にある河合社の神主の家に生まれた鎌倉時代の歌人鴨長明はこのように歌を詠んだ。

石川や瀬見の小川の清ければ　月も流れをたづねてやすむ

月も見とれるほど清らかな水。それは瀬見の小川にとどまらない。気をつけて見渡せばいたるところに水が溢れている。森を抜けると「みたらし池」と呼ばれる小さな池に至る。この池の水もいつも澄みきっている。水は地下から汲み上げているという。宮司の新木直人さんに話を聞いた。

「私が子供の頃、糺の森は今よりもずっとたくさんの水に溢れていました。森の中に湧き水をたたえた大きな池があって、子供たちがよく水に浸かって遊んでいました。ここは、鴨川と高野川の合流地点に位置します。だから二つの川の伏流水が境内に湧き出していたのでしょう。糺の森という地名の由来も水と関わりがあります。これには諸説あるのですが、糺は元は『直澄』、澄みきったきれいな水が湧くところという意味だったそうです。みたらしの池も、今は人工的にポンプで地下水を汲み上げていますが、私が子供の頃は豊かな水がコンコンと湧いていました。夏の盛りの時期には、丸い水泡がポコポコと吹き出しているのが目に見えたものです。この泡の形をまねて作ったのが〝みたらし団子〟。今は日本のどこでもみたらし団子が作

られていますが、下鴨の団子がその元祖だといわれています。こうした水泡を象(かたど)った食べ物が生まれるほど、この下鴨神社は昔から水の豊かな土地として、京都の人びとに親しまれてきたということです」

大正から昭和初期の頃の糺の森の写真におもしろい光景が写されていた。瀬見の小川で撮影された友禅流しの光景である。今では考えられないが当時は川幅も広く水量も豊かであったため、友禅流しにはうってつけの場所だったのだろう。夏の盛りには、池の上に茶店が建ち並んだ。盆地独特の酷しい暑さの中、森に囲まれた涼やかな泉の上での宴席は、さぞかし心地よかっただろう。今でも夏になると鴨川の上に広い縁を張り出し川風とともに食事を楽しむ「床(ゆか)」が京都の風物詩となっているが、それが下鴨神社の境内でも行われていたのである。明治以降、下鴨神社は官幣社として事実上国が管理する神社となったが、それでも庶民はわが庭のようにこの水の聖地を愛し、親しんでいたのである。

こうした庶民の楽しみは、今でも祭りの形で残されている。七月の土用の丑の日

に催される「みたらし祭り」である。

「足つけ神事」とも呼ばれているこの祭りは、格式ある祭礼であるにもかかわらず、誰でも気楽に参加できるのが特徴である。脱いだ靴を手に持ってみたらしの池に入る。三十メートルほど水の中をジャブジャブと歩く。はじめはくるぶしぐらいの高さの水がだんだん深くなり、膝丈ほどの深さになる。池の端まで歩いて最後に献灯する。みたらし池の水は地下水なので、水温は年中十八度程度。夏真っ盛りの時期にこの水に浸かると、ぞくっとするほど冷たく感じられる。数分間浸かっているだけで足がジンジンとしびれてくるほどだ。水から上がると、体中の熱が抜けてしまったような気がする。まさにうってつけの暑気払いである。それだけでなくこの水に足を浸けると、一年の無病息災が叶えられるという。祭りの当日は御利益(ごりやく)を求めて、京都だけでなく関西一円から人びとが訪れる。老若男女が入り乱れ、歓声を上げながら水の中を進む。浴衣姿の子供は腰まで水に浸かっている。水と京都の歴史の奥深さを如実に物語るほほえましい光景である。

「鴨脚」を名乗る一族

下鴨をはじめとする京都の水の聖地「カモ」の地を守ってきたのはカモ氏である。カモ氏もカモ川同様、上賀茂では「賀茂氏」、下鴨では「鴨氏」と表記する。明治以降、上賀茂・下鴨神社の神職は国から派遣されることになり、カモ氏とカモ社との直接的な関わりは絶たれてしまったが、それ以前はカモ氏が両カモ社を守ってきた。カモ氏は京都では「社家（しゃけ）」と呼ばれる。社を守る神職の家という意味だ。

カモ氏は、「県主（あがたぬし）」という称号を朝廷から賜るほどの実力ある地方豪族だった。古代の京都で最大級の豪族だったといってもいい。しかしいつの頃からか、カモ氏はカモ社の神職として、カモの神の祭祀に専念するようになる。平安遷都とともに

京都の主として天皇を迎えたために、自らは実質的な治世から身を引き、職務を神事に特化していったと考えられる。いずれにせよ、かつての大豪族が一族を挙げて神に仕える集団に転職した。巨大な神職集団が誕生したのである。上賀茂社の社家は一五〇あまり、下鴨の社家は五十あまりにおよんだ。だから同じ一族でも皆が神社の要職につくことはできなかった。先に挙げた鴨長明は、下鴨の河合社の禰宜（ねぎ）になるつもりだったのだが、一族の中のライバルに敗れ、夢が叶わなかった。そこで、世をはかなんで隠遁生活を送ったという。

「賀茂の神主」という言葉がある。お金のない人を揶揄（やゆ）する言葉だ。昔、上賀茂神社の神主で膳内という人がいた。神主だけでは生計が立たないので内職に精を出した。織物を縫い合わせて賀茂川人形を作っていた。しかし材料の織物は高い。そこでしょっちゅう西陣の織り屋に端切れをもらいに通っていた。そこで西陣の人びとは膳内をもじって彼を「銭無い」と呼んでからかったという。真偽のほどは定かではないが、花の都で栄耀栄華を求めるわけでもなく、ひたすら神に奉仕し続けてき

た一族の姿を伝えている。

上賀茂神社の目の前には、今も社家町が残されている。どの家もほぼ同じ形をした、いわば神主の長屋である。家の前には明神川（みょうじんがわ）という小川が流れていて、どの家の門前にも橋が架けられている。おもしろいのは川の水を庭に引き込み、また川に戻す独特の水利設備である。川の水が最上流の家の庭を通った後また川に戻り、次の家の庭に引き込まれる。このように一つの水を社家町全体で共有する仕組みが作られていた。各戸に導かれた水は庭の池を満たす。この水を用いて曲水の宴などを催したという。これは川の水だが、地下水を利用した重要な装置もあった。禊（みそぎ）の井戸である。今はどの社家の井戸も涸れてしまったが、かつてはこの井戸の水でカモの人びとは身を清め、神社に出仕していた。——毎朝、日の昇る頃、建ち並ぶ社家のそれぞれの家で、禊が行われる。隣の家でも、またその隣の家でも。雨の日も、寒さが身を刺すような雪の日でも——。まさに都の水を守る一族にふさわしい光景ではないか。

残念ながら、今は上賀茂・下鴨とも、カモ氏の子孫は世襲の神職の座にない。さらに社家町の家々も大半がカモ氏の手を離れ、売りわたされてしまった。それでも一族の誇りは残されていた。

賀茂県主同族会理事長の西池成晃さんと同会の藤木文雄さんにお会いした。賀茂県主同族会というのは、上賀茂神社の社家であったカモ氏の末裔たちの親睦会だ。上賀茂・下鴨を問わず、明治以降カモ氏はさまざまな事情で全国に散り散りになってしまった。しかしその伝統を霧散させまいとして結成されたのが、同族会である。西池さんは、今は神戸に住んでいる。

藤木文雄さんは、電機メーカーに勤めるサラリーマンだった。しかし退職後、祖先のカモ氏の研究を独学で進めた。カモ氏に関する古今の学者たちのあらゆる研究書を読み漁った。そして祖先のカモ氏について膨大な資料ライブラリーを作り上げた。藤木さんは歴史家ではないが、見せてくれた資料の山が彼の熱意を物語ってい

る。藤木さんは開口一番こう言った。

「カモ氏は、代々宮中のモヒトリノツカサに仕えるモヒトリベだったんです」

モヒトリノツカサは「主水司」、モヒトリベは「水部」と書く。

「カモ氏には数多くの家系図が残されています。その中でも史料として信頼性の高いのが『賀茂神官鴨氏系図』です。そこには、カモ氏がカモ大社の神官を務めながら、同時に宮中の水に関わる任務を負っていたことが記されています。まず最初は孝徳天皇（在位六四五～六五四）の時代。われわれの祖先であるカモ氏の家長・黒日が主水司の水部に任じられました。主水司とは宮中の神事に使う水を掌る役所の責任者、あるいはその役所そのものを指します。神事のほかにも、氷室を預かったり、井戸の管理をしたり、また大嘗祭で天皇が身を清めるために御槽に入る時の水を用意したり。つまり宮中の水全般をあつかう役所です。カモ氏が任じられた水部はその実行部隊。カモ氏四十人でこの職務を果たしたと、組織構成を具体的に記す史料もあります。『鴨氏系図』は、カモ氏が黒日に始まり吉備、麻呂、津守等々、代々

この水部の務めを果たしてきたと記しています」

黒日をはじめ鴨氏系図に記載される水部は、すべて奈良時代の人物である。カモ氏は都が京都に移る前から天皇家の水の番をしていたのだ。

上賀茂神社周辺には、当時の氷室の跡が数ヵ所残されている。猛暑の中、カモ氏はここで氷を作り奈良の都まで届けていた。この時代から、山背（京都）は水に恵まれた土地だと奈良の人びとも認識していたことがうかがえる。桓武天皇が奈良から京都に都を移そうと思い立ったのは、そうした歴史の延長線上にあったのかもしれない。天皇にとって、水のエキスパートたるカモ氏の存在は大きかった。カモ氏に任せれば新都の水は大丈夫だと安心したに違いない。

天皇とカモ氏をつなぐもの、それはやはり「水」であった。

上賀茂の社家と同様、下鴨神社の社家の子孫も親睦会を作っている。その会長の家は下鴨神社の南にある。もとは糺の森の一角であったところだ。会長の姓は「鴨

脚」。これで「イチョウ」と読む。名前の由来について鴨脚家には次のような言い伝えがある。景行天皇（記紀では十二代の帝とされる）が熊襲を討つために大和を離れ親征の旅に出た時の話だ。親征の一軍は旅の途中、カモの一族の家に立ち寄った。憩いのひとときを過ごした天皇は、この家に繁る銀杏の葉を見て、当主に歌を一首詠み与えた。

意巾通耐里　　銀杏の葉音が聞こえるか
鴨乃脚如介友殿馬声　　鴨の脚のごとく可憐に色づく銀杏の葉
沢丹五十庭雲葉如介友殿　　音をたて絶え間なく舞い散る落葉たち
写苔沢邇栄繁樹　　苔むす沢のごとく、繁れるこの木々のごとく
奈賀家栄遊文　　そなたの家が栄えるように　　（筆者現代語訳）

景行天皇はカモ（鴨）の一族の庭に繁る銀杏の葉を鴨の脚に見たて、一族の繁栄を言祝いだ。この伝承を誇り、「鴨脚」と名乗るようになったという。鴨脚家の屋敷そのものは江戸時代の建築だが、平安建都以前からの歴史を考えれば、京都で一、

二をあらそう旧家といって過言ではない。私が初めて鴨脚家を訪ねたのは平成十三年の春であった。通された広い奥座敷は何とも言えず心地よい。庭に面した南側は全面ガラス戸。手作りの古いガラスはていねいに磨かれ、春の日差しが柔らかに差し込む。調度類は電球の傘にいたるまでかなりの年代物だ。代々使い続けた物であろう。すべてに品格がある。洋もののアンティークで飾られた昨今はやりのインテリアとは趣きが異なる。長い歴史に培われた美的感覚がそこかしこに充溢している。

今の当主、鴨脚慶夫さんは大正十三年（一九二四）生まれ。初めてお会いした時は七十七歳であったが、一八〇センチ近い長軀をピンと伸ばし、実に翌鑠としていた。かつては立命館大学でラガーマンとして鳴らしたという。豊かな銀髪の下には潑剌とした笑顔。面立ちはまさに「公家顔」である。よくいわれる「引目勾鼻」なのだが、それだけではない。何とも形容しがたいが、「曇りがない」お顔なのである。世事の些細な欲望や悩みなど我関せずといった、超然とした風が感じられる。そして通常の人の二倍はあろうかという福耳。後日、葵祭りの前祭にあたる御蔭祭

の行列に参加した鴨脚さんの衣冠束帯を拝見したが、まるで歴史絵巻から抜け出してきたような姿であった。家柄や血筋という言葉は過去の遺物には相違ないが、鴨脚さんのような人を見ると「歴史が培った顔かたち」があるのだと実感する。

さぞかし浮世離れした人生を歩んで来られたことだろうと聞いてみると、存外の答えが返ってきた。終戦後復員して務めた会社が軍需関連の企業であったために廃業を余儀なくされ、京都市の清掃作業員に応募。市の職員として採用された後は、徴税の現場に携わった。市の有力議員にも平気で食ってかかるので、かえって可愛がられたそうだ。そうしたところが育ちの良さなのだろう。次第に頭角を現すようになり、ついには市の東京事務所長を務めるまでに至る。定年後の今は、かつてのラガーマンの経験を生かし、スポーツ関係のさまざまな団体の世話役をしている。

さてわれわれの関心はカモ氏と水と天皇との関わりであった。ところが鴨脚さんは慎重だった。「わしは歴史に疎うてな。いい加減なことは言えへんし。自分の目で見たことと、自分の耳で聞いたこと以外は、何一つ言えません」と申し訳なさそう

に言う。益荒男の鴨脚さんらしい率直な言葉だ。

それでも何か手がかりはないか。何度も鴨脚家に通わせてもらった。そして何度目かの訪問の時、鴨脚さんが、「うちには、古いもんが、ようけあります。まあ大したもんやないけど、見てもろうてもええで」と言ってくれた。ふだんは防犯上の問題からよそに預けている先祖伝来の品の数々を、特別に拝見させてくれるという。その数は膨大だった。特に文献類はおびただしい数にのぼる。一枚一枚鴨脚家の歴史をたどるように史料の山を探っていくと、一つの傾向が見えてきた。乗馬と蹴鞠関係の書物が多いのである。葵祭りに際して奉納される流鏑馬や、正月の蹴鞠始めなど下鴨神社の神事に由来するものだ。江戸時代の文献によれば、鴨脚家の祖先はこうした技術を御所の公家連中にも教えていたらしい。鴨脚家と御所とのつながりが序々に浮かびあがってきた。

「これは、孝明天皇さんのご婚礼の時の雄蝶雌蝶です。三三九度の杯に酒を注ぐ銚子ですな」

大きな櫃を開けながら、鴨脚さんが言う。真鍮製だろうか。今も黄金色に輝く大きくて立派な銚子だ。それに続いて次々と目の前に家宝が並べられていった。

孝明天皇の妹・和宮（一八四六～七七）から賜った香炉や人形。御所から下賜された絵画や屏風もある。

「われわれカモ氏の先祖は、神社の社家を務めながら、一部は御所にも奉公していたということでしょうな。幕末には和宮の乳母をしていた女性もいたと聞いております。その方は、御所の方々にずいぶんかわいがられて、和宮の降嫁の時には江戸についてきてくれと頼まれたほどやと聞いております」

一般にはカモ氏は平安以降、神職に専念したように思われているが、実際には天皇家と深い関わりを保ち続けていた。その証の一つが鴨脚家に伝わる書物や下賜品である。

豪華な下賜品とは別に、興味深い物を見つけた。御所の絵図である。御所の部屋割りが記されたその絵図には、「井戸」の位置が細かく記されている。その数は実に

一一〇におよぶ。井戸を詳細に記しているのは、火事に備えた防火用の図面であったためだと考えられる。それにしても、御所の中だけで百を超える井戸があったというのは驚きだ。しかもその絵図をカモの一族・鴨脚家が所持していたという点が意味深い。もともと都の水の番人「水部」だったカモ氏は、平安以降江戸時代に至るまで、連綿と御所の水を管理する役目にあったのではなかろうか。

鴨脚家の庭には、不思議な水の設備がある。深さ四メートルほどの大きな穴である。構造は複雑だ。深くなるごとに形が異なる。一番上の部分だけを眺めればごく自然な庭池の形に見える。しかしその下に目を移すと穴の形は真四角に変わる。さらに下にいくと円形の穴となる。その一番下の部分に水が溜まっている。鴨脚さんは言う。

「これは溜まり水じゃなくて、湧き水なんです。地下水が湧いておるんです。つまりこの穴全体が大きな泉なんですな。昔から、ここの水位は鴨川の水位と同じであると聞いております。実際、鴨川の水嵩が上がると、この泉の水位も上がります。

台風などが来て大雨が降れば、家の軒下まで水が来ます。この泉にはおもしろい言い伝えがあります。泉の水が御所につながっているというんです。ここの水位が上がれば、御所の井戸の水位も上がる。そういういわれの泉なんです」

鴨川、そして御所の水位と連動する泉の水。そう思って見ると、この穴の奇妙な形にも特別な意味があることがわかる。穴の中の水位が上下するとともに泉の水面の形が変わるように設計されているのだ。水が満々とある時には、自然な園池に見える。水位が少し下がれば泉の形は真四角に変わる。そして水位がずっと下がれば、丸い井戸のように変わるのだ。これはまさに水位計ではないか。カモの一族・鴨脚家の祖先は、この下鴨の庭の泉で、鴨川や御所の地下水の水位を見守っていたのである。これこそカモ氏と水、そして天皇を結びつける最大の証ではないか。求め続けていた実証がようやく得られた。京都の水の歴史がここから読み解けるかも知れない。複雑な歴史の織物を解きほぐす糸口が見つかったのである。

一直線に並ぶ「緑の道」

京都の歴史をたどっていく上で気をつけなければならないことがある。歴代の御所の位置である。平安京が造営された当初、御所つまり大内裏（だいだいり）は平安京の中心を貫く朱雀大路（現在の千本通り）の北端に位置した。京都で北に向かうことを「上がる」南に進むことを「下がる」というのは御所が北端にあったことに由来する。また平安京の東を左京、西を右京と呼ぶのは御所のある北から南を眺めた時、左側が東（逆に右側が西）であったためだ。大内裏は東西一一七四メートル、南北一三九三メートルの巨大な敷地を有した。そこにはさまざまな官庁や内裏と呼ばれる天皇のプライベートスペースが建ち並んでいた。しかし大内裏は天徳四年（九六〇）に

炎上して以来何度も焼失の憂き目にあった。そのたびに天皇は洛中の貴族の屋敷を借りて自らの住まいとした。これを里内裏という。そして鎌倉初期以降、大内裏は再建されることさえなくなり、天皇は転々と居所を変えていった。ようやく場所が定まるのは南北朝に入ってからのことで、それが今の京都御所にあたる。

御所の移り変わりを記した年表を見るとおもしろいことに気が付く。まず意外なのは平安中期以降、天皇の住まいはほとんどが里内裏であることだ。火事の度に大内裏は再建されているはずなのだが、そこに戻っている時期よりも外の里内裏にいる時間の方が圧倒的に長いのである。つまり天皇は里内裏にいるのが常態だったといえる。次に里内裏の場所であるが、点々とさまざまな場所に移されているものの、そのほとんどが左京、しかも今の京都御苑の周辺にある。おおざっぱにいえば「平安中期以降、天皇は京都御苑の周囲に邸を構えていた」のである。

これについて、花園大学助教授で考古学者の山田邦和さんから興味深い事実を聞いた。平成八年、かつての大内裏の中で井戸が発掘された。場所は内裏の近くで、

内酒殿（うちのさけどの）という酒を造る施設に付随する井戸であった。それまで大内裏の中で井戸が見つかったことはなかった。大内裏にはそれだけ井戸が少なかった、とは今後の発掘成果を見るまで断言はできないが、いずれにしても平安京内のほかの場所と比べて大内裏は水が豊かな土地ではなかったのではないかとの推測が成り立つ。しかもこの井戸は七メートルものきわめて深い井戸であった。先述したように平安時代の井戸は二メートル前後のものが大半だったのだから、この場所がいかに水が出にくいところだったのかを如実に物語っている。山田さんは言う。

「大内裏のあった場所は地盤が硬く、しかも周囲より若干小高い。したがって地震や洪水などの被害を受けにくい、都で最も安全な場所でした。しかしその一方で水には恵まれていなかった。想像するに池も造れず、木々の緑にも乏しい殺風景なところだったと思います。天皇や皇族もそうした場所に暮らすことにうんざりしていたんじゃないでしょうか。一方、左京にあたる今の京都御苑周辺には有力貴族の邸が軒を連ねていた。おそらく水が豊かな土地だったのでしょう。天皇や皇族もそうした場所に暮らしたいと思ったとしても不思議はありません」

天皇が水を求めて御所を移したというのは、示唆に富む考えだ。仮にそうだとして、なぜ右京ではなく左京だったのか。これは、古くから論議されてきた平安京の謎の一つである。平安京は朱雀大路を中心に左京と右京が均等に作られていた。ところが、時代を経るにしたがって右京はどんどん寂れていき、左京のみが発展していく。有力貴族の屋敷が集中するのも左京だし、庶民の暮らしも左京の方が圧倒的ににぎやかだった。この右京衰退という歴史上の謎も、地下水との関わりで読み解けるのではなかろうか。

まず、地下水の水量はどうか。これを詳細に調べ、左京と右京を比較するのは不可能に等しい。井戸を一つひとつ見てまわったとしても、地下水位の現状がつかめるだけで、その地域全体の水量の多寡を知ることはできないからだ。そこで代替案として、水を大量に使う染め物の工場が現在どのあたりに分布するのかを調べてみた。京都染色協同組合連合会の協力で、連合会に属する三つの組合（京都友禅協同

組合、京都誂友禅工業協同組合、京都彩芸美術協同組合）の名簿を入手し、住所を頼りにその所在地を確かめた。染色業者が集中している場所の傾向をつかむのが目的である。すると染色業者は左京の堀川の周辺に集中していることがわかった。堀川は平安時代に作られた運河であるが、今もその伏流水がこの周囲に豊富に流れていることを示している。一方、右京にも業者の集中する地域があるが、その範囲はごく限られている。ただこの調査だけでは、右京より左京が地下水に恵まれているとまでは断言できない。

課題は残ったままだった。

それにしても同じ巨大な水甕の上にある京都の中で、水の豊かな土地とそうでない土地があるというのはどういうことなのだろう。そして、鴨脚家の泉の「鴨川の水が下鴨の泉と御所の井戸につながっている」という不思議な伝承は何を意味しているのだろうか。

人工衛星がとらえた京都の写真を見て不思議なことに気付いた。鴨脚さんの家がある下鴨、そしてその水とつながるという京都御所。この二つには共通点がある。広大な緑である。下鴨には糺の森がひろがる。御苑はそのものが巨大な公園だ。アスファルトで覆われた京都にあって、この二ヵ所はひときわ目立つグリーンゾーンである。そしてその延長上にもう一つの緑があった。二条城だ。

二条城は、先述したようにもともと天皇の庭・神泉苑があった場所にあたる。カモ氏の聖地・下鴨と天皇の住まいである御所、そして天皇の庭・神泉苑は一直線に並んでいる。さらに御所のある京都御苑と二条城の間には京都府庁がある。府庁の建つ地域は織田信長が足利将軍のために建てた壮大な居城があった場所だ。下鴨から二条城に至る直線上には、京都の歴代の支配者たちの拠点が、まるで年表のように並んでいるのである。

まず下鴨神社は京都が都になる以前の古代豪族の支配地であった。次いで京都御苑は平安の有力貴族たちの住まいであり、後に天皇が移り住んだ一等地である。そ

の南西の京都府庁は、戦国の覇者織田信長が京都における拠点を作ろうとした場所にあたる。そして二条城。かつて天皇の庭・神泉苑であった地を天下人となった徳川家康がわが物とし、朝廷を威圧するために巨大な居城を築いた土地である。

権力者の居所が連なる、知られざる緑の道。

これもまた水と関わりがあるのではないか。下鴨の糺の森は京都の水の番人だったカモ氏が治める京都の水の聖地である。葵祭りを主催することで、天皇もこの水の聖地を篤く敬ったことはすでに述べた。また水に恵まれない大内裏から天皇が移り住んだのが京都御苑。この周辺には数多くの銘水が存在することを思い出してほしい。そして古代、巨大な泉があった神泉苑、今の二条城……。

神泉苑は、平安京造営以前の太古からこの盆地にたたえられていた巨大な泉であった。その水は山背の大地から湧き出る地下水であった。その跡地に建つ二条城の堀は今も豊かな水をたたえている。徳川家康は神泉苑の湧き水を利用して、堀を築いたのである。

太古の昔から涸れることなく湧き続ける神泉苑の水は、平安時代には都にとってなくてはならない重要な役割を果たしていた。当時の文献にはしきりに神泉苑が登場する。都が水不足に陥った時の記録だ。

たとえば清和天皇の時代、貞観十七年（八七五）の記録。――雨が数十日降らない。農民は仕事ができない。古老が言う。「昔から神泉苑の池には神龍が住む。鐘を鳴らし太鼓をたたけば神龍が目覚め、雷雨が降る」。そこで勅命が下り、藤原遠経が神泉苑に派遣された。遠経は宮中の楽人を率いて神泉苑に向かった。池に龍舟を浮かべ、その上で鐘や太鼓を鳴らし、歌を歌わせ、舞を舞わせた。その大きな音が天を震わせた（『三代実録』による）。

続いて醍醐天皇（在位八九七～九三〇）の時代の記録。――九月に入っても雨は降らない。都の井戸はことごとく涸れ果てている。陽成上皇は冷泉院の東北の門を開いて池の水を庶民に分け与えた。しかしその冷泉院の池の水も涸れてしまった。醍醐天皇は勅命を発した。「神泉苑の東北の門を開け」。これにより神泉苑の水が人

びとに与えられた。その水は都の諸人（もろびと）におよんだ（『日本紀略』による）。

同様の記録は山とある。都が日照りに苦しむと、天皇はまず神泉苑で雨乞いの儀式を行った。歌舞音曲で水神を目覚めさせようとしたのだ。それでも効果が表われないと、帝の勅命で池の水を庶民に開放した。平安京の人びとにとって、神泉苑の水はいざという時に備えた貯水池であった。そしてその貯水池を支配・管理するのが天皇の役割だったのである。

神泉苑は、平安京の主たる天皇の治水政策の要であった。そして繰り返すがこの神泉苑と、天皇の住まいである御所と、天皇が敬った都の水の聖地下鴨神社は一直線上に並んでいるのである。この三つは水でつながっているのではないか。三ヵ所を結ぶ直線の地下に「見えざる地下の水道（みずみち）」があるのではないか。そうだとすれば下鴨の鴨脚家の泉と御所の井戸がつながっているという伝承も理解できる。これは単なる私の思いつきではない。先の章でも書いたが、現在の京都中心部の東半分に暮らす人びと、つまりかつての左京の人びとの多くは、自分たちの井戸水は鴨川の

伏流水だと信じている。左京の東北のはずれに建つ下鴨神社のあたりから、鴨川の水が地下の水脈を通って流れ込んでいると考えているのだ。

実際に鴨川の水量が少なくなると、旧左京の井戸水の水位も低下するという。鴨脚家の伝承もこうした人びとの日々の体験から生まれてきたものだろう。

京都の人びとが長い歴史の中で体感してきた見えざる「水脈」を、なんとか科学的に立証できないか。この問いに、関西大学教授の楠見さんは慎重に答えた。

「水脈というのは、暮らしの中で経験的に感じているものであって、科学的に実証するのはきわめて困難です。京都盆地の地下にある水甕の上では、どこでも同じように水がたたえられていると考えるのが、科学的に一番正しい表現なのではないでしょうか」

それでは、なぜ水の豊かな場所とそうでない場所の差が生まれるのか。楠見さんの説明を整理すると次のようになる。

一、水甕を構成する岩盤の上には、砂礫と粘土が規則正しくサンドイッチ状に堆積している。京都盆地が何度も海になった時代の古い地層である。これは京都盆地のどこにでもあてはまる。したがってその中に蓄えられる地下水もどこでも大差がないということになる。

二、ただし例外が一つ存在する。現在の地表に近い地層である。これは最後に海水が退いた後、今日に至るまでの間に京都盆地の表面に堆積した新しい地層である。この地層は、場所によって土壌の構成が異なる。また、場所によって地層の厚さも異なっている。

三、新しい地層の土壌の違いは、堆積のメカニズムの相違による。大気中の埃が積もる場合、氾濫した川によって山から土石が運ばれる場合、海水が退いた後も沼や池となった場所では、水中の細かな土が時間をかけてゆっくり水底に堆積する場合もある。

四、新しい地層の土の種類は、大別すれば砂礫と粘土の二つに分けられる。川が氾

濫した場所には砂礫が多く、逆に水の流れの少ない湿地帯などには粘土が堆積している。

五、砂礫か粘土かの違いが、地下水に大きな影響をおよぼす。砂礫は粒子が大きく、粘土はきわめて小さい。粒子の大きい砂礫は隙間も大きい。そこに地下水が蓄えられる。しかもその地下水は粒子の隙間を自由に動きまわることができる。つまり砂礫層では地下水が「流れて」いる。逆に粒子がきわめて小さい粘土層には水が忍び込む隙間がほとんどない。ようやくしみ込んだ水も、細かな粒子に阻まれてなかなか動くことができない。

「地表面に近いところでは、その地質によって地下水の流れに差ができます。砂礫が優勢な場所では、地下水が豊かに流れているために、井戸を掘れば簡単に水を得ることができる。その反対に粘土が優勢なら、水を得るのは困難でしょう。ただし、これはあくまで京都盆地のごく表面のことをいっているに過ぎなくて、深い井戸を

掘ればどこでも同じように地下水を得ることができるのです」

現代では深い井戸を掘ることが可能だが、昔の土木技術には限界がある。事実、明治以前の京都の井戸はほとんどすべて浅井戸だったことがわかっている。話を浅井戸に絞れば、歴史上の水脈がつきとめられるのではないか。楠見さんは言った。

「地表面に近いところの地質を調べ、そこが砂礫が優勢な土地か、粘土が優勢な土地かで色分けしてみましょう。砂礫が優勢なところが連続すれば、それが水脈といえるものになる可能性があります」

楠見さんのもとには、幸いなことに地下の水甕を調べるときに集めた京都市内のボーリングデータがある。それを利用すれば、砂礫と粘土の分布を調べることができるはずだ。数日後、楠見さんの研究室に呼ばれた。

「予想以上に、明確な結果が出ました。砂礫層が優勢なところと、そうでないところの差が、はっきり分かれていたのです」

楠見さんが作成したのが一四五ページの図である。地表から十メートルまでの砂

礫と粘土の構成を示している。砂礫は白、粘土は黒で表示されている。一〇〇パーセント砂礫なら真っ白、粘土分が増すに連れて灰色になり、一〇〇パーセント粘土の場合には真っ黒になる。

この図は、京都の歴史をもののみごとに語っていた。

まず平安京、今の京都の中心部はどうか。一目瞭然で、そこが京都盆地全体の中で白が優勢な場所であることがわかる。地下水が簡単に汲み取れる地域であることを示している。楠見さんは言う。

「古代の人は、大変な知恵を持っていたのだなと感心しました。同じ京都盆地の中でも、平安京が異なる場所に建てられていたら、千年も続いたかどうかわかりません。逆にいえば、京都盆地の中で良質な地下水が最も簡単に得られる場所を選んでいたからこそ、平安京が長続きしたのだと思います」

次に平安京の左京と右京を見比べてみよう。明らかに左京の方が白い。右京と比べ、左京の方が良質な地下水が得やすい土地であることが実証された。